

市場文化会館だより



いかがお過ごしですか？

『大衆を愛した詩人』

西條 八十(やそ)

戦前から戦中・戦後・高度成長期まで約五〇年にわたり、童謡から流行歌まで幅広く作詞を手がけた西條八十(一八九二―一九七〇)。早稲田大学仏文科教授を務めつつ、大ヒット曲を生むマルチな才能に一部から批判が集まりますが、八十は「詩に貴賤はない」との信念で、大衆の心を癒やす詩を書き続けました。

●若き詩人の目覚め 東京牛込に生まれ、歌舞音曲に囲まれた少年時代。父の死で若くして家族の生活を支えながら、詩や童謡との出会いが道を拓きました。関東大震災の時、ハーモニカの奏でが被災した人々の心を癒やしました。その時、音楽が持つ力と素晴らしさに気づきました。また、この頃「金子みすゞ」を最初に見出しています。
(『かなりあ』『お山の大将』『肩たたき』『まりと殿様』など)



●詩人の苦悩 早稲田大学に職を得て仏文学研究に打ち込みながら、流行歌の大ヒット曲を連発。文学界からの批判に耐えて、己の道を進みました。しかし、戦時下には軍歌の作詞を強いられ、教え子たちを戦地に送る辛い時期を過ごしました。(『東京行進曲』『東京音頭』『旅の夜風』『蘇州夜曲』『支那の夜』『誰か故郷を思はざる』など、軍歌・戦時歌謡として『空の軍神』『同期の桜』『若鷺の歌(予科練の歌)』など)

●戦後の歌謡と弟子たちの活躍 戦犯に疑われた時を経て、多くの人々が愛唱した昭和歌謡の代表曲『青い山脈』が誕生しました。大衆音楽への姿勢に共感した若者が集まり、佐伯孝夫、サトウハチロー、門田ゆたかなどを輩出しました。(『三百六十五夜』『青い山脈』『越後獅子の唄』『この世の花』『りんどう峠』など)

●最愛の妻との別れ 愛妻・晴子を六四歳で亡くし、自身は咽頭ガンに冒されながらも執筆活動を続けましたが、一〇年後の一九七〇年に七八歳で死去。長年の夢、詩人ランボオ研究を大著にまとめた他、遅れていた日本の著作権発展にも尽力。そして、人々の心を打った麦わら帽子の詩。(『王将』『絶唱』『ぼくの帽子』『芸道一代』など)

なお、八十は小松島中学校の校歌を作詞しています(作曲は堀内敏三)。(BS朝日「昭和偉人伝」などより)

「手話コーラス」について

阿波市人権フェスティバルに「ぱあわーあっぷ」(「学習会」の後継)の子どもたちが「手話コーラス」で参加するようになって、はや15年の月日が経過しました。その目的は次の通りです。

「聴覚・言語障がい者について理解し、コミュニケーションの手段である手話を学ぶことによって、わたしたちの生活の中でより手話を密接なものとし、障がいの有無に関わらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共同社会の実現に向け、一人ひとりがいきいきと暮らせる社会づくりにつなげていく。この学びによって、達成感や充実感を感じ、自信をもって生きる力にし学習意欲や規範意欲を育てる。」

参加しているのは「ぱあわーあっぷ」に登録している子どもたちです。また、八幡小学校の学習発表会や市場文化会館の館まつりでも「手話コーラス」を毎年、披露しています。

2017年の徳島県人権教育研究大会分科会では「ぱあわーあっぷ」の指導員が、そして本年の四国人権教育研究大会分科会で阿波市社会教育課の職員が「手話コーラス」について説明しています。

2022年11月

阿波市人権フェスティバル



2019年10月

阿波市人権フェスティバル



2015年11月

阿波市人権ふれあいフェスティバル

